

北海道言語研究会 研究例会報告

2021 年度の研究例会は、新型コロナウイルス感染症の流行状況に鑑み、規模を縮小して一回のみ開催した。日程とプログラムは下記の通り。例年通り、参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

*訂正:『北海道言語文化研究』第 19 号に掲載の「研究例会報告」における「第 19 回研究例会」と「第 20 回研究例会」の記載は、正しくは「第 20 回研究例会」と「第 21 回研究例会」です。

・第 22 回研究例会（2022 年 3 月 28 日（月）13:30--15:50@Zoom Meeting）

13:30--14:10

小野真嗣（室蘭工業大学・国際交流センター）

「国内留学/地域内留学の構築と試行 ―海外研修に代わる学修プログラムの実践―」

本発表は、本学近郊の地域資源と本学留学生を活用した国際共修活動の他、他県に立地する拠点大学へ訪問し、当該大学の留学生と地域資源を活用した訪問型対面交流活動に関する試行的な教育実践の報告である。コロナ禍 2 年目の 2021 年も、海外への留学や研修は再開できていないが、感染対策の知見は増え、地域内の対面活動は徐々に再開できるようになった。一方、コロナ初年度よりオンライン接続を通じた海外との直接的なコミュニケーションが創出できるようになったものの、普段の生活環境から離れ、連続した日数を対面で異文化体験できる「留学」的な機会は、学生から強く求められるようになり、その代替活動の構築が必要に迫られた。本発表では、2021 年度に手探りながら構築できた複数の代替プログラムを事例として報告し、各学生の参加報告書に基づいて、その手法や効果を検証していく。

14:20--15:00

三村竜之（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「アクセント研究諸概念管見」

発表者は 20 余年に渡り、特にストレス（強さ/強弱）アクセントを中心にアクセントの記述調査・研究を進めてきた。その成果をまとめた形で公表することが本発表の目的ではない。発表者がアクセント研究に関して日々考えている理論・実践の両面に関わる様々な問題点や疑問点、課題等々について一研究者の雑感として述べ、また聴衆諸氏との議論を通じてアクセント研究にまつわる諸概念の整理と理想的なアクセント研究の姿を模索することを目指す。扱う事項は次のとおり：アクセントとイントネーション、ストレス（強さ/強弱）とピッチ（高さ/高低）、音声実質の可能性、型と体系、聞き取り調査の課題。

15:10--15:50

塩谷 亨（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ハワイ語、タヒチ語、サモア語における場所・移動・様態を表す前置詞について」

サモア語、タヒチ語、ハワイ語はポリネシア諸語に属する同系の言語である。そのため、これらの言語は前置詞についても多くの同系のものを共有している。しかしながら、その用法を比較すると、それぞれ大まかに類似する要素は見られるものの、不一致もまた存在する。今回は、場所、移動、様態を表す前置詞について三言語間での対照を行った。その結果、同系の前置詞の機能が言語間で一対一で対応しない場合、例えば、一方の言語で一つの前置詞で担う機能がもう一方の言語では二つの前置詞の機能にまたがっている事例等が見られた。

スタイルシート

- (1)使用言語:日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。宛先: HLCJournal@gmail.com スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとする。
- (7)ポイント数および書体 :
- | | | | |
|--------|-----------|------------------|------|
| 題名: | 18 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 氏名: | 14 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 要旨: | 9 ポイント | 「要旨」という文字のみ太字 | |
| キーワード: | 9 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 | |
| 本文: | 10.5 ポイント | | |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字 | |
| 謝辞: | 9 ポイント | 「謝辞」という文字のみ太字 | |
| 注: | 9 ポイント | 「注」という文字のみ太字 | |
| 参考文献: | 9 ポイント | 「参考文献」という文字のみ太字 | |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード:5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、注の番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URL、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2021年3月31日改定)

『北海道言語文化研究』 投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』 への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。
宛先: hlcjournal@gmail.com
4. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
<http://u.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<http://u.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日 23:59 (JST)とする。
7. 投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。適切な査読者の手配ができない場合は、投稿が受理されないことがある。
8. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
9. 稿料は払わない。

(2021 年 3 月 31 日改定)

北海道言語研究会 <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、HLCJournal@gmail.comまでお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailでhokkaidolinguisticcircle@gmail.comまでお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第20号

2022年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：HLCJournal@gmail.com

連絡宛先：hokkaidolinguisticcircle@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

北海道言語文化研究

第20号

2022年

論文

- 新約聖書「ペテロの第一の手紙」における裏返し構造 大喜多 紀明 1
- 生態学的意味論に基づくアイヌ語地名の分析 井上 拓也 21
- 共通語と村山方言における発話機能を意識した発話の韻律的特徴 高村 めぐみ 41
- ノルウェー語南東部方言のアクセントの再検討-アクセント論の視点から- 三村 竜之 61
- サモア語における魚の成長段階名称について 塩谷 亨 91
- The Digital Keyword Method in an Analog Classroom** Scott SUSTENANCE 113
- Disruption and distraction in online and physical classroom environments**
John Guy PERREM 133

研究報告

- 徳島方言における第5類2拍名詞の拍内下降の痕跡について 島田 武 155

Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 20

2022

Articles

- The Reversal Structure of the First Epistle of Peter in the New Testament** 1
Noriaki OHGITA
- An Analysis of the Ainu Place Names Based on Ecological Semantics** Takuya INOUE 21
- Prosodic Features of Utterances when Paying Attention to the Function of Murayama Dialect** Megumi TAKAMURA 41
- Tunes and Tones in South-eastern Norwegian Reconsidered from Accentological Viewpoint** Tatsuyuki MIMURA 61
- Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Samoan** Toru SHIONOYA 91
- The Digital Keyword Method in an Analog Classroom** Scott SUSTENANCE 113
- Disruption and distraction in online and physical classroom environments** John Guy PERREM 133

Research Report

- On the Trace of Intramoraic Tonal Declination observed in Class 5 Bimoraic Nouns in Tokushima Dialect** Takeshi SHIMADA 155

The Hokkaido Linguistic Circle